

Title	新刊紹介 人口問題二著
Sub Title	
Author	寺尾, 琢磨
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.3 (1936. 3) ,p.405(121)- 413(129)
JaLC DOI	10.14991/001.19360301-0121
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360301-0121

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

限られた事ではない。例へば經濟現象の如き、その一半は明かに量的現象に屬し、而もそれに関する計數の多分に集積せられつゝある現狀の下に於て、今なほ多數の經濟學者は或ひはこれを無視し或ひはこれを誤用し濫用し、折角の計數をして徒死せしめつゝある狀態である。

由來、數なるものは一般に一々の抽象概念であり、これを取扱ふには特殊の思惟方法即ち數學を必要とする。然るに統計の示す計數は、それが事實の集積だといふ意味に於て、單なる抽象物ではなく一々の具體物なのである。故にその取扱ひには一段の工夫を必要とする。同一材料について數學的には幾多の異なる結果に到達しうる。例へば a と b なる二數の平均は算術平均によれば $\frac{a+b}{2}$ 、幾何平均によれば $\sqrt{ab}$ であり、その何れも數學的には正しい。併し社會現象の解析に於て斯かる運算に遭遇した場合、吾人はその現象の本質より、その何れを探るべきかを決定せねばならぬ。斯くて統計數學一般を處理する數の理論、即ち統計的解析法と相並んで、各特殊部門の特殊的解析法、例へば景氣統計に於ける時系列解析法、人口統計に於ける出生率・死亡率の測定法の如きものが發展せしめられたのである。

茲に紹介する Kuczyński の「人口増殖の測定」は人口統計の處理に於ける最難點たる増加率測定に関する諸問題を扱つたものである。著者は著名なる人口學及び統計學の専門家で、この方面に關する既に幾多の著作がある。本書は本文二三三頁、序文六頁、統計附録二〇頁及び索引より成る。本文は六章に分たれ、第一章に於ては出生統計の吟味、例へば生産と死産、公生と私生等に關聯して正確度の測定を問題とし、第二章に於ては生命統計のみからの出生率測定を論ずる。人口統計の初期に在ては國勢調査は行はれず、主として教會の保存する出生・死亡及び婚姻の記録から測定されたから、この種の測定法を知ることが、特に政治算術派の文獻を理解するに甚だ必要である。

然るに合衆國に於ては斯かる記録存在せず、從て出生率の算出も一に國勢調査に依る外はなかつた。幸ひ合衆國は最も早く國勢の調査を實施した國であるから、斯く周期的な調査から出發する特殊の測定法が發達したのである。これに關する諸問題が第三章の内容である。

然るに今日に於ては各國に於て出生・死亡及び婚姻の記録が行はれると共に、國勢調査が普及して、爲に人口統計を著しく豊富ならしむるに至つた。斯くて最も合理的な計算は、右の兩者を利用する事によつて可能となつたのである。第四章「生命統計及び人口調査の利用による出生率の測定」は斯くて本書の中核を成すもので、分量もこの一章は六〇頁を占め、粗製出生率、一般出生率、特殊出生率、總出生率、及び再生産率の如き基本問題を網羅する。これらの正確な測定法を了解せずしては、人口増加の科學的基礎は到底求め難いのである。

以上各章は何れも出生に關する事項であるが、人口増加は出生と死亡との差によつて行はれる以上、死亡の研究の必要なるは言ふ迄もない、併し出生と死亡の何れが研究上より重要かと言へば、今日に於ては疑ひもなく出生なのである。往時に於ては、出生は婚姻の自然的結果で、從つて婚姻率に大なる變動のない限り、出生率も亦比較的不動であつた。反之、死亡は、災害・饑饉及び疫病等の慘禍が大であつたため、遙かに可變的で、從つて人口増加に、より大なる影響を與へたのである。然るに近時文明國に於ては、人工的産兒調節の普及によつて、出生と婚姻との關係は次第に稀薄となり、出生は著しく可變性を帶ぶるに至り、他方死亡は、衛生、交通等の發達によつて漸次可變性を失ひ來つたのである。即ち人口増加を規定するものは、死亡よりも出生であり、本書の著者が特に出生に就て詳論する所以である。死亡の研究に當てられたのは第五章のみである。併し該章のうちに、生命表及び標準死亡率の如き重要且つ困難な問題が巧みに取扱はれてゐる。最後の第六章は出生と死亡との均衡に關するもので、人口増

加の本質、例へば生命指數、純再生産率、就中 Bortkiewicz 及び Lotka 等によつて發展せしめられた安定人口の問題を包含する。

本書は斯く人口の自然増加を對象とするもので、従つて移住による人口の増減は全く取扱はれてゐない。且つその計算に使用された計數は、人口に關する官廳統計の整備せる諸國に限られ、就中一九三四年に至る最近六十年間の期間を採つてゐる。記述の様式は可成り専門的で、讀者に人口問題に關する「一般的知識を豫定したと思はれる。人口問題の如く、その取扱ひの元來極度に困難なるに拘らず動々もすれば甚だ淺薄な論議の旺んなる現状の下に於て、本書の如き基本的著作は大いに推賞されてよいのである。(丸善實價、拾圓六拾錢)

(2) Friedrich Burgdörfer, *Aufbau und Bewegung der Bevölkerung*, 1935.

昨年十二月中旬、佛國前大臣ベルノウ氏は巴里毎日新聞に一文を寄せて、同國人口の増加趨勢が隣邦、就中獨逸及び伊太利のそれに比して甚だ寒心すべき状態にあるを指摘し、一般國民の反省を求むるところがあつた。一九三三年の同國の自然増加は僅かに二萬一千六百名に過ぎない。而もフランスは周知の移民來住國で、これら移民の間の出生率は本來のフランス人よりも遙かに高いを常とするから、右の僅かな自然増加すら、果してフランス人の増加と認めうるか否かは甚だ疑問なのである。何れにしろ、フランスが既に人口の生長を停止した老衰國であることは、同國の年齢別人口を一覽する事によつて容易に肯けるのである。國際關係の切迫せる今日の歐洲に於て、この事實は當然フランスの最大の悩みでなければならぬ。

併し將來人口の減退を嘆くのは決してフランスに限られた事ではない。それは程度に多少の差はあつても歐洲の殆ど總ての國々に共通の現象なのである。即ち、誇張的言辭を以てするならば、白人種の漸次的死滅と言つてもよ

いのである。そして死滅を欲せざらんとすれば、素より計畫的人口増加策が採用されねばならぬ。かかる政策は既に諸國に於て次第に考案せられ來つたが、就中、人種問題を極度に重視し自國民を以て世界最大の文化保持者と自負する獨逸ナチス當局の政策は、この種の政策の最も典型的なるもので、人口過剰の重壓に呻ぐ我國に於ては殆ど想像し得ない各種の積極的政策が既に可成りの程度に實施されてゐるのである。次に紹介せんとする「人口の構成と運動」は下題として *Ein Führer durch die deutsche Bevölkerungsstatistik und Bevölkerungspolitik* (獨逸人口統計及び人口政策概説) と記され、獨逸人口の危機とナチス人口政策の辯護及び宣傳を内容とする可成り通俗的な著作である。

著者 Burgdörfer は現在獨逸學會に於ける代表的人口學者であり、兼ねてベルリンの統計局課長として實際方面にも活躍しつゝある人である。氏の數年前に發表した「青年なき國民」 *Volk ohne Jugend* は記述の巧妙と結論の大膽なるによつて獨逸の朝野に巨大なる反響を捲起した。蓋し氏は該書のうちに、獨逸民族は「土地なき民族」で、狹小なる領域の上に夥多の人口が密集し、生活程度は低下し、他方出生率の驚異的減退は單に相對的國力を薄弱ならしむるのみか、遂には民族の消失を招來する可能性すら多分に認められると警告したからである。

本書は元來、ベルリン國家醫學士院 (*Staatsmedizinische Akademie*) に於ける一九三三年乃至三四年の冬學期の講義を更に擴充したもので、上記「青年なき國民」の改訂版とも見られるのである。目次の大様を示せば

(A) 人口統計

(一) 人口の状態と構成 (人口と人口増加。性別、年齢別及び家族狀態による人口構成。國民の原子としての家族。不具統計)

- (二) 人口の運動(方法的緒言。一八四一年以降の獨逸人口の歴史的概観。獨逸國の最近の人口發展。出生力の正確な測定。死亡表。獨逸民族の生命表の精製。外國に於ける人口發展)
- (三) 獨逸人口發展の動態、民族の消滅と老衰の危險

(B) 人口政策

- (一) 内地植民政策 (Siedlungspolitik)
- (二) 現獨逸の最初の民族衛生的方策
- (三) 家族負擔の平等化

斯く第一部は人口統計の解釋であるが、著者はこの部のみに實に五十八のグラフを挿み、最も効果的に獨逸人口の危機を印象づけんと試みてゐる。勿論この部分が單に威脅的記述に終始するものではなく、各所に於て正しき統計の見方を示してゐる事は、本書の學問的價值を相當高からしめるものではあるが、過度の饒舌は多分に通俗的な印象を與へるやうである。獨逸民族の出生率の著しい減退が氏のセンセイショナルな記述によつて深い印象を與へた事は事實であるが、併しこの現象は學界には既に數年以前から注目された事實に過ぎず、私も屢々この問題を取扱つてゐるから、こゝにその内容を再び紹介する必要はないと思はれる。

斯くて本書の最も興味ある部分は第二部の人口政策に關する所説であらう。これは一面に於ては氏の人口理論が現在のナチス政府の瞠目すべき人口政策の基調を爲してゐる事實から許りではなく、他面に於ては該書の中に最近數年間の政策の効果が巧みに描寫されてゐるからである。氏の主張し、且つ現に獨逸に於て實施せられつゝある又は實施せられんとしつゝある人口政策は大別して次の三つである。第一にジードルングの設定による農業人口の

維持發展を擧げうる。今日人口の三分二は都市に集中し、嚴密な意味に於ける農業人口は總人口の約四分之一に過ぎないが、人口繁殖力の旺盛なのは言ふ迄もなく農業人口の間に於てゐるから、この種の人口を保護し養成することとは、人口増加策として甚だ有効であらう。事實 Reichsiedlungsgesetz 發布後一九三四年末までに既に百二十萬ヘクタルの土地がこの目的の爲に獲得された。併し氏も斯かる手段の限界は充分に認識し、その補助手段として都市住民に自然に親しむ機會を多からしむべしと説いてゐる。現に行はれつゝある市民農園の如き制度は斯くて今後益々發展せしめられるであらう。

第二には民族衛生的の方策を擧げうる。この場合注意すべきは、氏及びナチス當局が人口増加に腐心し乍ら、その目的が單なる人口數の増加ではないといふ事である。即ち一方に於ては結婚獎勵に熱中し乍ら、他方に於ては斷種法を制定して肉體的精神的不適者を漸次一掃せんと努力して居るのである。アメリカ合衆國の二十七州に於ては既に斷種法が實施されてゐるが、これは單に囚人中、特に心身の不健全なる者に限つて施衛されるもので、一九三五年一月迄に男八六四四名、女一一四一九名、合計二〇〇六三名に實施した。然るに獨逸のそれは單に囚人に限らず、一般國民のうち一定の遺傳的疾患を有する者は總てこの法律の適用を受けるのである。一九三四年十二月末日迄に申告された人數は男四二九〇三名、女四一六六二名、合計八四五二五名の多きに達した。惟ふに遺傳的低劣者の社會的國家的意義は既に科學的に極めて詳細に論證されてゐながら、これが根絶に努力する國家の斯く稀なるは誠に奇怪千萬である。我國の如く、單に人口が過多のみならず、その質的方面に極めて多くの不適者が存在するに拘らず、今以て何らの對策も講ぜられてゐないのは何が故か。放任すれば次の時代に我國には心身ともに薄弱な、生活力乏しき人口が狹隘な領土の上に奔めくであらう。無爲無能の爲政者に國家の將來を委ねる事の如何に危險な

るかは、單にこの一事からも明かである。ナチス政府は *Reichsgesetz* の提案に基づき、積極的人口増加策、即ち結婚奨励法を制定し一九三三年八月以來實施するに至つた。當局は婚資を缺く青年に千馬克を限つて無利子にて貸與することとし、一九三五年三月迄に既に四十萬組の結婚を實現したのである。返却は毎月、貸與額の二%、即ち約八ヶ年にて完済する規定であるが、若し子供が生れれば一ヶ年間は返却を猶豫し、且つ總額の四分一を免するから、引續き數人の子供を産めば殆ど大部分は返済の必要がなくなるのである。この種の恩典は素より直接の効果を與へる筈で、著者もその將來に多大の希望を懸けてゐるやうである。猶ほヘルリン市——これは世界に於ける最も出生率低き都市である——には特別の産兒奨励が行はれ始めた。例へば一九三四年三月四日の *Morgenspost* によれば、ヘルリン市に於ては第三兒は最初の一年間は毎月三十馬克の補助金を、滿十四歳までは二十馬克を支給する外、各種の特典を附與するに決したといふ。

最後の手段としては、産兒奨励の爲めには子供を持つことをして少くも經濟的不利たらしめざる事を必要とする。近來の顯著な産兒制限は明かにこの不利を認識した結果である。人口増加は當然經濟的負擔を増加する。この負擔が單に多産の夫婦のみに落下するのは國家的政策に背反する。斯くて著者は或ひは税法の改正により或ひは育兒金の貸與により、即ち一方に於ては獨身又は子なき者に負擔を増加し、他方に於ては子多き家族を救済することに依つて、子供の有無多少による負擔の不公平を均等ならしむる必要を力説する。斯かる政策も、勇敢なナチス當局の下に於ては恐らく近く實施される事と思はれる。

人口増加の趨勢に於て獨逸と正反對の傾向を辿る我國は、素より如上の諸政策をそのまゝ倣ふ必要はない。吾人

は寧ろその正反對の政策を考案し實施すべきである。右に於て倣ふべきは、政策の内容よりは寧ろそれを敢へて採用しつゝある獨逸當局の果敢な態度であらう。併し我國の當局をして斯かる勇敢さを獲得せしむる爲には、先ず第一に國民に向つて我國人口の危機を了解せしめねばならぬ。この意味に於て本書の如き通俗的にして而も科學的、煽情的にして而も具體的な著作が我國に於ても上梓せられん事を希望して止まないのである。(丸善賣價、八圓四十錢)